

第62回経営協議会議事録（案）

1. 日 時 令和元年6月25日（火） 13時55分～16時05分
2. 場 所 ホテルクラウンパレス浜松 4階 芙蓉の間
3. 出席者 今野（議長）、紀平、猿田、布村、正木、御室、門田、山本、渡邊、田中、金山の各委員
陪 席 宮嶋副学長（教育改革担当）、浦野副学長（情報・広報担当）、蓑島副学長（研究担当）、緒方副学長（産学連携・知財担当）、西山監事、村本監事

4. 議事録の確認

第61回経営協議会議事録（案）を原案どおり確認した。

5. 議 事

（1）平成30事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について

渡邊理事、金山副学長から、平成30事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について、全体的な状況の中から主な成果について配付資料に基づき説明があり、審議の結果、原案どおり承認した。

（2）平成30年度決算（案）について

田中理事から、平成30年度決算（案）について、配付資料に基づき説明があり、審議の結果、原案どおり承認した。

また、西山監事から、監査報告書に基づき監査の方法の概要及び監査の結果について、適正なものであると配付資料に基づき報告があった。

（3）令和2年度概算要求（案）について

田中理事から、令和2年度概算要求（案）について説明があり、審議の結果、原案どおり承認した。

（4）規則の改正等について

① 職員給与規程の改正

総務課長から、職員給与規程の改正内容について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認した。

② 準職員就業規則の改正

総務課長から、準職員就業規則の改正内容について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認した。

③ パートタイマー職員就業規則の改正

総務課長から、パートタイマー職員就業規則の改正内容について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認した。

④ 諸料金規程の改正

総務課長から、諸料金規程の改正内容について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認した。

⑤ 医学部附属病院諸料金規程の改正について

総務課長から、医学部附属病院諸料金規程の改正内容について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認した。

(5) 報告事項

①平成 30 年度監事監査意見報告について

西山監事から、平成 30 年度監事監査における意見について報告があった。

②静岡大学との連携について

議長、企画評価課長から、静岡大学との連携について報告があった。

次回の経営協議会について（11 月 19 日開催予定）

※学外委員からの主な意見（○：学外委員の意見等、◆本学側の意見・説明等）

議事(1) 平成 30 事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について

○臨床・研究・教育のバランスが非常に良く、そのバランスを保ちつつ、今まで進んできていると思う。入試は業績を上げている中、二次試験の比重を大きくしているが、変更された理由は何かあるのか。

◆センター試験における個々の受験生の評価は記憶力が主体であると考えている。国立大学 86 法人の中で、センター試験と二次試験の比率はかなりばらばらである。例えば東大や京大では、個別試験が 10 に対し、センター試験が 1 という割合で、ほとんどセンター試験は考えていない。その他の大学に関しては様々であるが、これまでの本学のようにセンター試験を重視する大学も少なくない。今回変更するにあたり、まずは教授会で 1 : 1 の案を提示し、意見を伺ったが、むしろもっと個別試験の比率を上げた方がよいという意見が強くあり、1 : 1.56 となった。まだデータが十分ではないが、個別試験の成績はセンター試験の成績と必ずしも平行ではなく、センター試験では上位であるが、最上位ではない人が個別試験でかなり良かったということがあった。そのことが知力が高いことを示しているかということ、まだデータ上、言えないが、少なくともセンター試験の評価を重視するより、個別の応用力や知力、想像力を評価できるのではないかと考えている。この評価は非常に難しいが、本学の入学試験は男女の区別や差別が全くなく、男女比率が常に 1 : 1 に近い状況である。実は今回センター試験の配点比率を変えたところ、ここ 2、3 年と比べ明らかに男子の合格率が増えている。この評価に関して、一概には決めつけられないので今後も見ていく必要があると思う。

○数年見ていて、すべてがあがってきている。そういったことで入試の改革をどういうふう考えているか。卒後研修についてもどう考えているのか。

◆私も必修化を後押しした一人だが、全ての科というわけではなく、基本的に外科の必修化を進め、これまでの研修の在り方から現在の卒後研修の形に変えた。とりあえず前進かなあと個人的には思っている。それが全科ということは実際にはかなり難しいと思う。

○入試の問題ですね。変えたらこうなったという短期間で、今わかる範囲内で長期的にはどのようなところを見ながら、これは正しい、好ましいという方向性でよいかということを見るためには何を考えていったらいいかと思う。

◆一年生の教養科目は非常に重要であると認識しており、先生方には気合を入れて、しっかり授業をしていただいている。しかし、中にはなかなかついてこられない学生がいると聞いており、危機感を持っている。また、自律的な学習がまさに必須であり、ディプロマポリシーどおりであるが、自らが問題点を見つけ、解決するというディプロマポリシーどおりやらないと、おそらくついていけないと思う。そのため、自分自身で自らを伸ばすことができる学生を本学としてはとる必要があると考えている。また推薦入試の原理も同じく、ある一定レベル以上の学力の高い学生にぜひ入っていただきたいと思っている。学力とは、記憶力というより応用力や思考力、想像力を指し、それらに重心をおかないと、医学の世界ではもたないと感じている。それらの判断材料は例えば国家試験であり、その他様々な

指標においても本学は決して悪くはないが、今後は双方向性の授業に舵を切り、アクティブラーナーをどんどん増やしていく予定である。その場合、記憶力だけではなかなか太刀打ちできないという思いがある。今後さらに検討していく必要があると考えている。

◆今回の変更により懸念されるのは、センター試験の成績が良くなかった人の受験が増えるかもしれないということであるが、少なくとも合格者に関して、センター試験の成績は昨年度、一昨年度と比べ、変わらない。

◆ご指摘は非常に難しい問題であり、入学生は、授業は教えてもらうものだと思っている、つまり、授業で教えてもらったことは覚えるけれども、教えてもらわなかったことは覚えなくてもいいという考え方でいる。極端なことを言うと教えてもらっていないからですという弁解をする。我々が期待しているのは問題点を自分の力で見つけ、その問題をどのように解決していけばよいか、自分の力で調べ、その中から解決策を見出していく能力が医学に限らず必要であると思う。ただ強化というと、何年先にどういう指標で評価したらいいかというのは非常に難しいので、現在入学してからの教員の感想を元に果たして導入してよかったかを検証していく。

◆医師、看護師になる過程で、高校から医学科・看護学科を受験する際のモチベーションはやはり非常に大事だと伺っている。実は看護学科はモチベーションが非常に高い受験生が多く、そのような評価が入学後の成績に反映している。高校教育を非難するわけではないが、医学科は、未だに成績が良いから、偏差値が高いから、という理由で受験する学生がかなり多くいる。モチベーションを入学試験という短時間で見極めるのは難しく、本人がまずはわかっているかどうか。せめてこのような形で個々の能力の深堀りをし、より適性のある学生をとれないかというのが広義である。

○教育、研究、診療、業務運営、全体で計画値を超えられた成果をあげられていて、素晴らしい成果だと思う。特に業務運営では、国際化の柱が良い成果につながっているため、一本独り立ちしてもいいくらい大きな柱に育てていただければと思う。入試については入試問題の作成、策定状況をきちんと評価していただき、継続的な学生の評価と検証をしていただければと思う。

◆国際化推進センターは基礎系講座の若い教授をセンター長に任命し、その下に専任講師を配置したため、環境的にかなり整備されている。国際化はそもそも本学が弱かったところであるため、大変ありがたい言葉をいただいた。大学院生も増えており、大学院の充足に四苦八苦したことが嘘みたいに嬉しい状況である。次のステップとしては質保証をしていきたく、同一の東アジアの特定の国が多くなってしまいが、そのあたりをもう少し試験的にスカイプでやっていただいているが、見極めていただいたり学長の推薦をしていただいたり協定校を中心にとったり、今質が悪いというわけではないが、中には途中で帰国する子もこれまではなかったが出ておりますので、そこを担保していきたい。

○産学官連携の推進、ベンチャー企業の育成、実用化、地域産業の発展に大変目をくれていただいて非常にありがたい。協定を結び、ベンチャー企業の育成に大変力を入れている。今後も浜松医大と浜松ホトニクス等の地域企業と連携し、この地域が高齢化、少子化の問題を長期的に抱えている中でどのように地域を支え、また発展させていくか、産業としての地域貢献についてより一層期待しているので、ぜひともよろしくお願ひしたい。そのた

めの人材と、医大さんと連携して医療関係のいろんな産業ができてくれればいいなあと思っている。医師は医療として独立はあるが、産業界としての独立はなかなかないと思う。しかし機器や検査機等、より一層目を向けていただき、産業界としての独立、山本先生に一所懸命やっていただいて、より一層中小企業を支援していただきたい。ぜひよろしくお願ひしたい。

◆ありがとうございます。ますますがんばってまいりたい。国や県の指標ででてくるのは、生産性向上出荷量、それだと産業がますます明るくなった、実際そのようなものではなく、生産性の高い技術が根付いた社会のためには我々としては何ができるか、光あるいは光医工学、医療の関係で人材を持続的にいわゆるエコシステムの話、産業が生まれてくる、育てくる、そのことに少しでもお手伝いできればと思っているので、むしろご指導いただかないといけないことが多いのでよろしくお願ひしたい。

○特に医療と工学部は産業界で非常に近い存在になっている。その仕組みを全国初で育てていっていただきたい。

○ぜひとも早めからいい研究は一緒にやっていただくと将来に向けてもそういう形であっていくのが一番重要だと思う。

◆結局これを研究のネタとして進めていけば、事業化に到達できる、やはりビジネスとしての観点が医療関係者に欠けていると思う。少なくとも AMED の方も含めてなるべく早いうちから進めていきたい。

○企業のトップの方の考え方により大分変わってくる。一番いい例は東京大学の藤堂先生。

◆光医工学の共同専攻の中に単価の医科大学が共同専攻を設置したという話で、それ以上に単価の医科大学が工学系の共同専攻を設置したという状況。これはかなり特異的。静岡発で産業界に寄与する人材を一緒になって、世の中に出そうというのは大学が一体となっておりますので。

○研究費、AMED 等を獲得されて素晴らしいなあと思っております。外部資金もかなり高額でずっとキープされていて、外部資金の受入額、たとえば看護では額は大きくなくても教員側にとってはやはり研究費、研究助成、外部資金に申請するということはかなり意味がありますし、若手研究者にとっても少額であってもアプライし、そして採択率をあげているということに意味があるのだと思います。件数とか採択率のそのあたりも評価はされているのか。

○本学の看護学科の先生方は、大変研究熱心であり、いろんな成果をあげられていまして、医療と看護は違いますので、医療的な看護という視点ではなく、看護独自の視点がまず大事だと思っている。そういうところにフォーカスを当てる研究に、具体的な数はわかりませんが、学内プロジェクトでいくつか支援させていただいております。先生方がおっしゃるように看護学科の先生方、いろんな事務費、いわゆる文房具類も含めて支出する財源がないですよ。そこは我々もわかっておりますので、財源の使い方等サポートできるようにさせていただきたい。

○産学の問題ですけども本席先生の例にもあるように本来、企業側の理念と大学側の理念は最終的に相いれない部分があるだろうと。株式会社は株主のために利益を出すのが大事であり、我々はそういうわけではないので、だんだんその問題が出てきたときに最後に調

整ができるような基本を踏まえながら考えていかないといけないと考えている。

国際化については今まで外国で学ぶことも多かったが、今後は我々が高齢化における医療や介護のノウハウを売っていく、教えていかないといけない立場ではないかと思う。そのような概念で高齢化のノウハウを享受していくという概念が必要ではないか、そういう概念で国際化を進めていかなければいけないと思う。

○最終的な企業の利益に加え、アカデミアとしての最終的な立ち位置を考えると難しいところもあるが、長い歴史の中にすり合わせを行われているので実際に創業した所が学内にありますのでそこを進展させていただきたいと思う。まさに浜松医大と浜松いわた信用金庫さんや静岡銀行さんが、医工連携棟に来ていただけるということで、いろいろな意味で実用化に向けた大きな力になるのではないかと思う。国際化については、大変貴重な意見ありがとうございました。

○看護学科の先生方は非常に科研費のほうがんばっていただいて、いい年ですと30%を超える採択率がございます。今年に関しては25%ですが、全体を数年見ていただいても非常にがんばっていただいております。